

SUPERPOSITION：4名による「重ね合わせ」展

2025.2.22－3.9 gallery2122

天羽生悠矢さん／河村晴実さん／城尾みのりさん／武田暢輝さんインタビュー



展覧会を開催するまでのこと

—今回は多種多様な表現方法を用いる4名が集まったグループ展で、「重ね合わせ」というテーマも非常に印象的でした。この展覧会を開催するきっかけと経緯をお聞かせください。

河村：それぞれ違った領域で活動しながら、プライベートでも仲良くしていた私たちの出会いは大学とアルバイト先でした。河村、城尾、武田で話をする中で、展覧会をしてみたいという気持ちを伝えたところ前向きに話が進みました。また以前、天羽生くんと二人で制作した作品をどこかで発表したいと思っていたこともあり、彼にも声をかけて開催にいたりしました。

—企画は3名でスタートしたけれど、展示したい作品として最初に思い浮かんだのは天羽生さんと河村さんの共同作品だったのですね。

河村：たしかに、そうですね。集まるべくして繋がったメンバーかもしれません。

—作品のタイトルにもなっている、SUPERPOSITION（重ね合わせ）はどのように名付けられたのでしょうか。

天羽生：僕たちがおこなっている表現方法は写真、詩、絵画、空間デザイン、ファッションなどとバラバラです。それらをひとつの空間で展示するときに、すくなくともこの角度から見るとどの作品もおもしろいよね、という共通テーマが必要だと思いました。また共同制作した作品も展示することが決まっていたので、それらをすべて包括できる言葉を探して、「重ね合わせ」という言葉が候補に挙がりました。



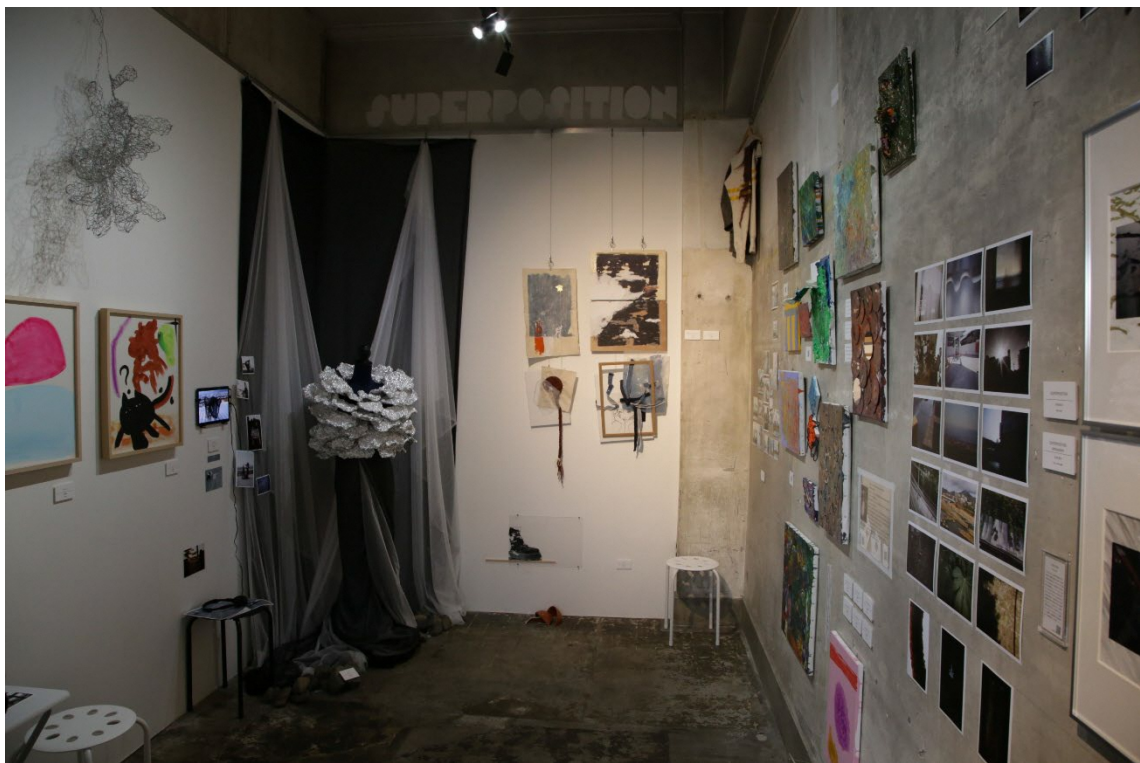
河村晴実・天羽生悠矢「ずっと錆びていた」(2023年)

天羽生：また、本展では長い期間作家活動が続けている人、この春に学校を卒業する人などが参加しています。そういった時間の移り変わりや、これまでの積み重ねの総括のようなこともできたらと個人的に考えていました。ほかのみんなにもそれぞれ思い当たることがあり、人と人、昔の自分と今の自分、ある素材とまたべつの素材。その3つを軸にして「SUPERPOSITION：重ね合わせ」をテーマに決めました。

一膨大な作品数で、展示室の床から天井の方まで作品が行き渡るような空間でした。

どのような経緯で構成されたのでしょうか。

天羽生：展示空間はなりゆきで決まっていたのですが、僕は空間の情報量を多くしたいと思っていました。また、Gallery2122 は小ぢんまりとしているけど、天井がとても高いことが印象的でした。それを活かした見応えのある空間にするために、4名それぞれの展示スペースをできるだけ広く使用して、ひとりひとりの作風も充分に伝わるようにすることを心がけています。

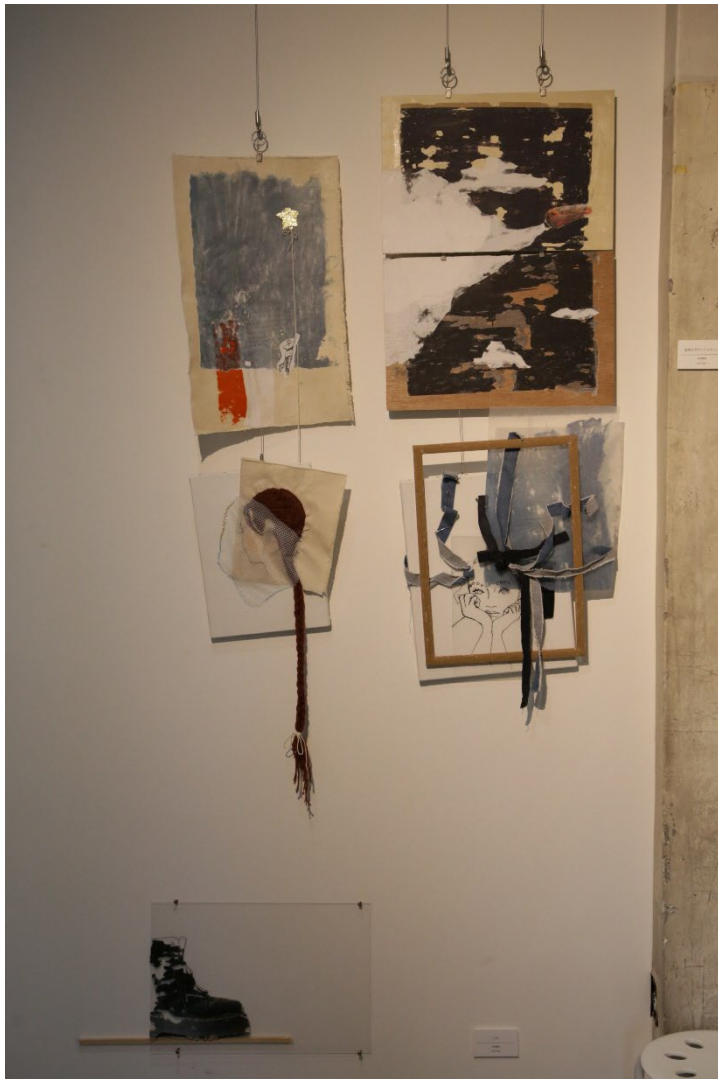


展示会場

これまでの活動と、展示作品について

河村晴実

河村：昔からよく絵を描いて遊んでいました。部活動での作品展示や、イベントのフライヤー作成をすることはあったのですが、展示を企画した経験はなく、今回が初めての展覧会です。



左上：河村晴実「金色のダウンジャケット」(2025)／右上：「キャロット」(2025)／下：「バグ」(2025)

こちらは全て新作です。取り入れたい色・素材・手法・日常で感じていたことを軸に、素朴に空想を形にした作品群です。ラフスケッチみたいな……。天井が高い展示空間にも影響を受けて、空や地面を取り入れました。

—作品には糸を編んでいたり、刺繍が施されていたりなど平面以外の表現がありました。そういった手仕事は普段からされているのですか。

河村：そうですね。作家としての活動はそんなにはないのですが、服飾サークルで衣装を制作して、ファッションショーを行ったり、友人の卒業式などでヘアメイクやスタイリングをしたりしていました。装いに関心を持っていて、好きだという気持ちが作品にも表れていたかもしれません。来場者の方には実際に観てもらえるので、素材の質感とその魅力がより伝わるような作品を制作したいと思っています。素材や手法をあれこれと重ねました。

城尾みのり

城尾：大学時代に縫製のお手伝いをしていて、服を縫うことや、作ったものをどう魅力的に見せるかといったことに興味を持ちました。この春から服飾の学校と、空間演出デザインの学校にふたつ通っています。ものづくりの授業課題や、個人的に作品をつくることがあるのですが、外に発表することは初めてでした。



城尾：まず、展覧会のテーマに沿った作品をつくろうと決めまして。私は授業で「水」をテーマに制作することが多かったのでそれを軸に構想を練りつつ、素材同士の重ね合わせという視点を加えました。水は綺麗でダイナミックなんだけども、じっと見つめていると吸い込まれてしまいそうなこわさを感じます。美しさだけでなく、不気味な感じも出せる素材ってなんだろうと考えた時にアルミホイルを思い出しました。くしゃくしゃに丸めたり、広げたりすることでダイナミックな印象から繊細な印象まで幅広い表情を見せてくれます。そして、この丸めたユニット同士が起こすカサカサという音はどこか水にも似ていて、これは重ねることで初めて生まれる魅力なので活かそうと考えました。布も使用しており、白と黒のチュールを重ねることで、水のなんとも言えない色味やぬるっとした質感を目指しました。これまでは要素として

水を使用することが多かったのですが、今回は水そのものを表現することを試みています。



城尾みのり「みずのかたち」(2025)

空間デザインについて勉強していることを活かして、ショーウィンドウのディスプレイのように展示しました。

—どうして水に興味を持ったのですか。

城尾：もともと水に興味を持っていたというより、課題などが出たときに「あ、水使おう」と直感的に思うことが何度もありました。最初は気づいていなかったのですが、課題発表の際にまた水を選んでもらえ、と周囲に指摘されて自覚するようになりました。たぶん鴨川の影響はすごくあって。学部も鴨川のすぐそばにあったので、川辺でお昼を食べてぼーっとしたり、河川敷を散歩して癒されたり。そんな生活にも繋がっているような気がします。

天羽生悠矢

天羽生：僕は小さな頃から趣味で写真を撮っています。学部生の頃は写真部に所属して写真展に出展し、運営にも携わっていました。そして 2023 年に写真を仕事にしたいと思うようになり、今は写真部を離れてライブハウス撮影の仕事や写真家の方の助手をしています。



天羽生悠矢「SUPERPOSITION」(2025)

天羽生：こちらの作品はメインビジュアルにも使用しています。僕は一枚の写真でも強度がある作品を目指しているのですが、まだ自分の納得いくようなものは撮れていなくて。自分が思う迫力やおもしろさを編集で出してみようと思いました。制作当初、城尾さんに水のモチーフが好きだということを聞きまして。水面って波と光の重ね合わせだよなと思ったことをきっかけに、水面の写真を撮りにいきました。そして実は、手の写真も水に関係しています。以前、水で濡らした手を浴室で撮影するというアイデアを自宅や友人宅で試していた時期がありました。これらを重ね合わせたものがこちらです。同じ手法を用いて他の作品も制作して、5点の連作をつくりました。



天羽生悠矢「SUPERPOSITION photographs」(2022-2025)

天羽生：隣には、編集していない元の状態の写真作品を展示しています。2022年から数年の間に撮り溜めてきた18枚の写真を展示しました。光と光が重なり合って明るくなっているところ、自分が6年間過ごしてきた部屋、大阪城という古い建物と京橋のビルという新しい建物、前景と後景がはっきりしている写真など……。そういった時間の積み重なりや画面内のレイヤーなどの重ね合わせを表現しました。



天羽生悠矢『2024年7月 能登島向田の火祭 参加・撮影記録集』

またこちらは、僕が所属している建築についての研究室の活動で撮影した写真を冊子にしました。去年、能登半島で行われている火祭の記録係としてお手伝いで行ったのですが、とてもいいものが撮れました。調査では実際に法被を着て、参加しながら撮らせてもらっていました。発表機会がこれまでなかったのですが、冊子にすれば現地の人にも届けられると思い制作しました。



こちらでは、大学院で取り組んだ研究成果を展示しました。

武田暢輝

武田：演劇をメインに表現活動をおこなっています。元々は役者をやっていたのですが、最近は書き手の方にシフトチェンジしていきました。また、絵を描き始めたのは

2018 年、大学時代です。詩を書き始めたのも同じくらいかそれ以降ですね。

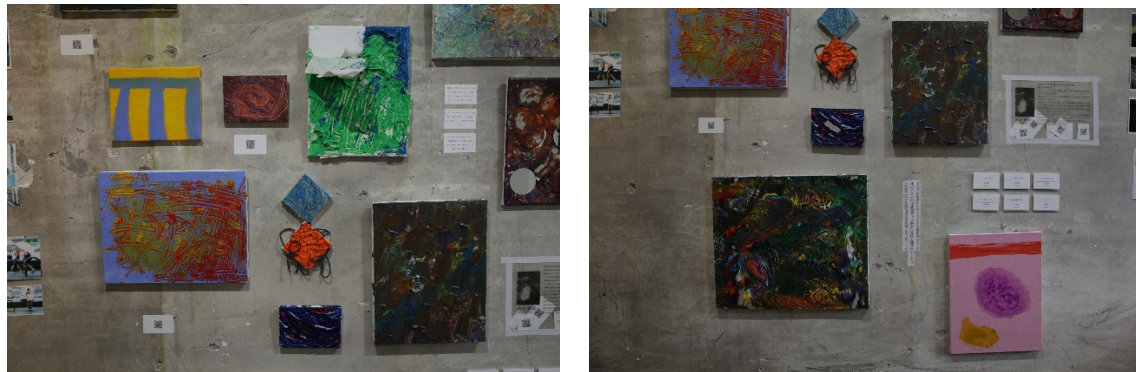


武田暢輝「ここに私はいない」(2019-2025)

—絵画に加えて、詩の展示が大きな割合を占めているように感じました。詩を書くことはどのようなきっかけで始められたのでしょうか。

武田：なんだったんでしょうね、ぜんぜん覚えていないです。でも詩に書くことは、独我論の考え方が根底にあるように感じています。私は「他人が認識する私」と、「私

が認識する私」が全く別物のようで、後者の特異性はなんなんだろうという気持ち悪さや不安定さを感じます。どこまでずっと「私」で居続けられるのかといった、そういう不安感を詩のなかでは多く書いていますね。



武田暢輝「ここに私はいない」(2019-2025)

河村：私も武田さんに聞きたいことがあるのですが。入って右側に展示していた作品は2020年からの作品も入っていて、時間の層が重なっているように感じていました。それはどのような感じで作られたのですか。

武田：過去の自分と今の自分。過去の自分の自分でなさ、としてのSUPERPOSITION というか、基本的にずっと私自身との重なり合いを意識しているかもしれないです。

河村：重なっていない部分もあるということですね。

武田：そうですね。剥がれ落ちた踵の皮膚はもう自分ではないような。そういった気持ち悪さについて向き合った作品です。



武田暢輝「ここに私はいない」(2019-2025)

武田：また、絵画はこれまでに描いたものと、新作では絵の中に素材をいろいろと埋め込もうと思い制作しました。SUPERPOSITION を意図してつくったのかは記憶が定かではないですが……。制作当初、大阪の国立国際美術館で「線表現の可能性」展というものが開催されていて、楽しみに足を運びました。すると立体作品がひとつしなくて、線ってそんなもんじゃないなと思ったんです。彫刻的な絵画もありますし、どうして平面的な線ばかりを使うのだろうと疑問を持っていたことも制作に影響しているかもしれません。

天羽生悠矢×武田暢輝



右：天羽生悠矢・武田暢輝「Yellow Light」(2025)／左：天羽生悠矢・武田暢輝「津津浦浦」(2025)

武田：たとえば、今ここになくて見るできない鳥丸今出川の信号機が今もきちんと動いているかどうかはわからないというような不安感があつて。こちらの制作は、すべてきちんと動いていることを確かめる装置としてつくろうということが出発点でした。信号機の写真を見ていて、黄信号の写真が目にはパッと入った時に、漠然とした不安を感じたんですね。これが並んでいたらどのようなことを感じるのか興味を持ち、並べてみました。そしたら想定外に可愛い感じになりました。

天羽生：僕は、撮影の協力をしました。ひさしがついているタイプの信号機の電球は一瞬明かりが消えるんですよ。赤、黄、青3つの電球が全て消える時間が一瞬でき

て、それをループさせると目が瞬きしているように見えているので、可愛いなと思っていました。

天羽生：また、映像の隣にかけている冊子にある詩は、武田さんが4、5年前の若い頃に書いたものです。武田さんがこれを読み返した時に、若いな、青いなみたいなことを言っていて、僕も同じような印象を受けました。確かに僕も20歳になったばかりの頃はこういう時期があったな、と思い出しながら写真を添えたいと思うようになりました。

天羽生：詩の形式が、段落や切れ目がなく一続きになっていることが特徴的でした。なので、直線的に続いていく感じを表現しようと思いました。また、似たフレーズが何度も反復して出てくるんです。「・・・でも私は私だし・・・」のような。そのような余韻を続かせる言葉選びに倣って、写真でも同じような効果を持たせたいと思いました。詩と写真の繋がり、余韻を来場者の方にも感じてもらえたらいいなと思っています。また、壁に手で押さえながら読むというのは武田さんのアイデアなんです。もともと冊子を吊るしておいて、読んでもらおうと考えていたのですが、ちょっと苦勞しながら読む感じにしたいということでした。そこについては、見せ方のアプローチの違いを感じていました。

武田：せっかく現地で読んでいただくので、なんらかの身体性を持たせたくて。とい

うのは演劇をやっているからなのかもしれないのですが、いつも通り読めてしまったら現場で展示として読んでもらうことの意味がないと思ったのです。

展示を終えて

—この展示を終えて、自身のなかで変化したことはありますか。

天羽生：たくさんある……。

河村：私は小さい時からずっと絵を描くことが当たり前だったのですが、だんだんそのハードルが上がっていました。浮かんでくるイメージを形にしないことが増えて。その一方で、つくることへの憧れが大きくなっていき、相反する気持ちを同時に抱えていました。なので今回は、刺繍などコツコツちまちまと手を動かしながらなんとか形にすることを大事にしようと思いました。いざ展示が始まる日が迫ってくると、とても緊張してこわかったです。それを乗り越えたことは大きな経験となりました。そして、今回いろんな方が見に来てくださっていて、そこには玄人の作家さんたちが来てくださり、たくさんつくることがやっぱり大事だという励ましもいただきました。また、お世話になった人、親とか先生も来てくれて、展示は人とまた出会ったり、交流したりできる場所だったんだと、前向きな影響をもらうことができました。さらに、来てくれた若い高校生の中には、このような展示活動が「羨ましい」と言ってく

れる子もいました。玄人の方からのアドバイスと、これからの挑戦に夢を膨らませる方たちの声を幅広く聞くことができ、そのような連鎖のなかに自分の作品があると感じられたのは、とてもおもしろい体験でした。

城尾：学校の課題や個人的な趣味としての作品づくりはうまくいったという自信作があっても先生や友人など、制作過程や背景を共有した内輪だけで見てもらうことが多かったです。今回の展示では当たり前ではあるのですが、作家として見ていただくので、なんの言い訳も通用しないような厳しさを感じました。みたもの、ここにあるものが全てだということを頭では理解しつつも、体験してみるととても新鮮でした。また、来てもらうお客さんや友人に褒めてもらうこともありましたが、ここをこうしたらいいといった厳しい意見もいただきました。最初は傷つくこともありましたが、直せるところは会期中に少しずつ直したりしていました。でも自分のなかで大事にしたところ、コンセプトの軸にあったものはそのままにするという選別の軸を会期中に少し発見することができて、それはおもしろいというか、とても勉強になりました。

天羽生：最近、自信を持って発表できることしかしたくないと思うようになり、今年写真部の活動をお休みしていたんです。今回はかなり自由が効くギャラリーということもあり、やりたいことが実現できたように思います。ひとに自信をもって招待できる展示ができて、本当に嬉しいという満足な気持ちでいっぱいです。僕にとっては最後の卒業展という立ち位置でもあったので、本当にいろんな繋がりの方や先生

が来てくださって、走馬灯をみているようでした。違う繋がりの方が会場に三組いるみたい。夢みたいなのがなくて、すごく楽しい時間でした。

武田：変化したことはないですね。それを言葉で語ることができていたら絵を描かないし、詩にはしません。わざわざこんなめんどくさい表現はしないです。まあ、ずっと変わっていつているので……。

取材日：2025.3.10